

市史だより

F u k u o k a

24

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring 2019

TAKE FREE

特集

福岡と糸島の

交差点

「西の玄関」、周船寺

contents

- 08 市史編さん室トピックス
- 09 部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）
- 10 「新修 福岡市史」ナナメ読み
- 11 連載コラム「タイムマシンでとなりの駅へ」
- 12 連載コラム「福岡市史への歩み」

特集

福岡と糸島の交差点

「西の玄関」、周船寺

人びとの往来のなか
で形作られたまち。
今も受け継がれるそ
の歴史をたどる。

文＝市史編さん室



周船寺は西側を糸島市に接する、福岡市の西のまちです。国道二〇二号線・福岡前原道路やJR筑肥線といった東西の大動脈が走り、高祖山や雷山を左右に見ながら曲淵に至る南北方向の県道五六号線がそれと交差する、交通の要衝ともなっています。道路だけではなく、このまちの姿は、歴史のなかでさまざまなものが交差しながら形作られてきたようです。今回は福岡市の「西の玄関」、周船寺の歴史を振り返ります。

● 「主船司」は船の役割

周船寺の地名は、古代の大宰府の役所の一つ、「主船司」に由来するといわれています。この主船司は、八世紀に置かれた「主船」という役職を

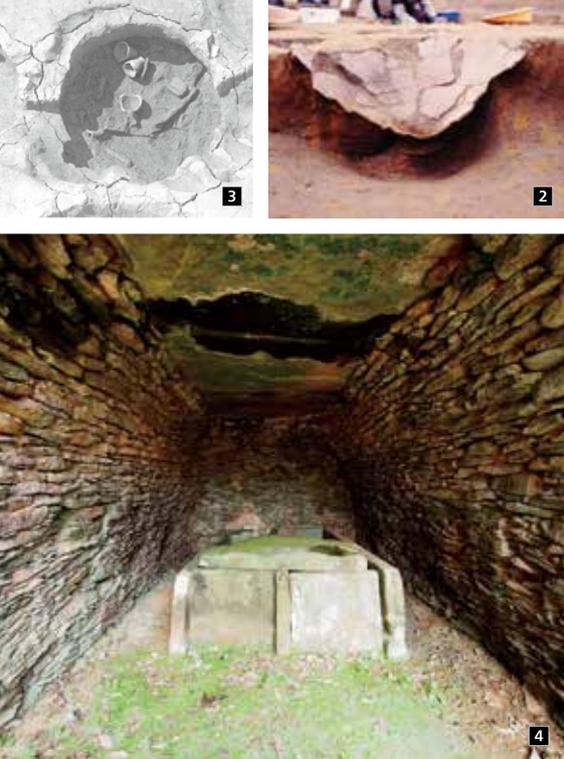
前身としています。主船は大宰府で必要とされる船の維持管理を担当し、時には新羅船の様式の研究もその任務としました。こうした役割を果たすために、主船のもとでは一九七人もの駆使丁が働いていました。これには、補修にあたる博多湾岸の船大工たちも含まれていたことでしょう。

九世紀になると、主船はほかの役職を置く代わりに廃止されましたが、その必要性が訴えられ、あまり時間をおかずに復活を果たしました。それからしばらくして、主船司と呼ばれる役所になったようです。

しかし、この主船司がどこにあったかは記録がありません。周船寺の地名と主船司は、どのように結びつけられたのでしょうか。

● スセンジという地名

スセンジが地名として記録に現れるのは室町時代のことです。嘉吉元（一四四一）年十月二十二日「少式教頼書下」（『新修福岡市史資料編 中世2』六二五頁）には、少式教頼が庄崎彦三郎に「同郡主船司名七町」ほかの領有を承認したことが記されています。しかし、現在の周船寺一帯は、筑前国怡土郡に属していましたので、この早良郡の「主船司名」は別の場所です。その少し後の長祿二（一四五八）年三月十一日の深川文書では、大内教弘が深川藤九郎（弘国）に与えた所領の一つに、「筑前国怡土郡主船寺九拾石地」があげられています（『大内教弘書状写』『市史研究ふく



【発掘調査にみる周船寺】縄文時代から弥生時代にかけての集落や墓地が見つかっています（周船寺遺跡①）。湿地が乾燥して陸化するなかで、縄文時代の終わり頃から、人びとの活動が見られるようになります（②は縄文人が周船寺に埋めた甕）。現在の国道202号線付近の少し高くなった場所では、弥生時代の竪穴住居や甕墓が見つかりました。そばには直径1mくらいの円い穴がいくつもあり、なかには大量の木の葉が蓄えられていました（前～中期頃/第7次調査③）。JR筑肥線沿いで発掘調査（第10次）で見つかった花粉を分析すると、弥生時代のこの辺りは、アカガシ亜属の広葉樹（ドングリの実をつける）やイネ科・クワ科などの草木が茂る、開けた草地だったらしく（前期、弥生人がこの辺りを歩きまわったり、木の葉を集めたりする姿が目に見えます）。また別の場所では、甕墓から碧玉製の管玉や石でつくった剣も見つかっています（前期/第6・8次調査）。4世紀から、今宿平野には多くの前方後円墳がつくれますが、なかでも最大規模を誇るのが、丸隈山古墳（墳長約85m）です。江戸時代に石室が開けられ、入り口部分を失っていますが、今も迫力のある石積み横穴式石室に横たわる石棺を見ることができます（④。昭和2年に修理・復原）。8月になると、「丸隈山古墳観世音大祭奉納花火大会」が開かれるなど、丸隈山古墳は周船寺のシンボルとなっています。

おか』第一二号、六一頁）。これは間違いなく怡土郡の地名です。スセンジの地名が怡土郡にあった古い例は、長祿二年ということになるでしょう。この「主船寺」がのちに「周船寺」と表記されるようになり、村名になったものと考えられます。江戸時代になると、村名の由来について、貝原益軒が古文書に「主船司」とあることを指摘しましたが（『筑前国続風土記』。雷山の古文書というが、未詳）、益軒の研究を継承した地誌では、「主船寺」という寺院名にもとづく可能性もあげられました（『筑前国続風土記附録』）。その後、青柳種信が「此村名古へ太宰府有し時、主船司を置いて官船を爰に繋きしより出たる名なるへし」と述べ、「主船司」に由来することを、積極的に説きます（『筑前国続風土記拾遺』）。種信は、長祿二年の古文書にも触れ、「長祿二年に大内教弘より深川に与へし書には、怡土郡周船寺と有。是は後のことなるへし」として、漢字表記の違いのちに起こったことと考えました。周船寺＝主船司という説は、種信以降に広まったといつてよいでしょう。

● さながら農業試験場？

この江戸時代の周船寺村の主要な産業は農業でした。周船寺一帯の農業を語るうえで、忘れてはならない人物が宮崎安貞です。安貞は安芸国広島藩の出身で、のちに福岡藩二代藩主黒田忠之に仕

えました。しかしすぐに辞して女原に居を構え、農業に従事します。そして多年にわたる農業の研究を、『農業全書』にまとめました。元禄十（二六九七）年に京都の板元から出版された『農業全書』は、明治に至るまで何度も版を重ね、ロングセラーとなりました。安貞は女原で農業を実践する一方で、農業の指導にもあたっていました。女原にとどまらず、周辺の農民が影響を受けたことは想像に難くありません。

『農業全書』の内容を少し見てみましょう。第六巻では藍を取り上げています。京都鳥羽地方の方法を引用しながら、種を得るところから、製品としての藍玉（暗めの青色を出す染料）に仕上げるまでを、詳細に紹介しています。目を引くのは、「苗地の事。蕪菁、大根の跡又ハ稲田もよし」、「藍を作るべき田にハ、稲の跡にからしを栽べし」という記述です。のちの記録ですが、明治初期に編集された『福岡県地理全誌』によれば、周船寺村では藍と大根をつくらせており、菜種も栽培しています。安貞から学んだ技術を、その後も活かしていたのかもしれませんが。

安貞が西日本各地より習得した農業技術を、周辺の農民に伝えていたとすれば、この地域は福岡藩のなかで先進的な農業がおこなわれた場所といえます。さながら、周船寺の一帯は農業試験場のようだったことでしょう。

● 農業だけにあらず

その一方で江戸時代の周船寺村は、唐津街道に沿って東西に展開しており、この街道と交差し、南には曲淵を経由し佐賀へ向かう道（現県道五六号線）が延びる、交通の要衝でもありました。そのため、村では商工業もさかんでした。

例えば、醸造業。『福岡県地理全誌』を見ると、唐津街道沿いの町村や、港をかかえる村のような輸送拠点となる場所では、酒・醤油・酢の生産がさかんです。周船寺も例外ではなく、こうした醸造業をおこなっています。特に酢は、怡土・志摩両郡のなかで一番の生産量を誇りました。昭和二（一九二七）年刊行の『糸島郡誌』では、「周船寺酢」として藩に献上されていたと説明されていますが、あながち根拠のない話ではありません。

● 近代の周船寺の産業

周船寺の産業は、明治時代になると、どのような様子だったのでしょうか。糸島郡（かつての怡土郡・志摩郡が合併）の産業については、糸島郡農会が「農漁業従事者が多い一方、商工業は未発達。工業は家族経営規模がほとんど」と記録しています（『福岡県糸島郡事一斑』）。なかでも周船寺村は、地理的に小規模だったことを反映して、郡内一九町村のなかで、現住人口一四位・農業生産

額一四位・工業生産額一〇位と、その生産力はいずれも高くない数字を示していました。

ところが、周船寺村の業種を詳細に見ると、独特な性格を持つていたことがわかります。江戸時代と変わらず醤油製造がさかんなことに加えて、菜種油粕などの植物性人造肥料の生産が、他町村と比べて抜きん出ているのです。明治四十三（一九一〇）年には、村内に「糸島米穀肥料株式会社」ができ、ほかに、「白木商店」「鱈屋商店」といった周船寺村の肥料販売店が『糸島新聞』に広告を掲載するなど、周船寺村は農業がさかんな周辺一帯への肥料の供給地として、独自の役割を果たしていました。また、人の移動には欠かせない足袋・草履・草鞋といった履き物の生産量が、町村規模の大きい前原町や今宿村と肩を並べる規模を誇っているのも特徴的です。

こうした特徴は、いずれも周船寺が前原・今宿とならぶ交通の拠点であり、供給に便利な位置にあったことによるものでしょう。周船寺村は農業がさかんな地域にあるだけでなく、交通の要衝でもあるという、まちの交差した特性を活かしながら、個性的な産業を展開していきました。

● 鉄道沿線のまち

交通の要衝というまちの利点は、新たな交通手段の登場によって、ますます増していきました。

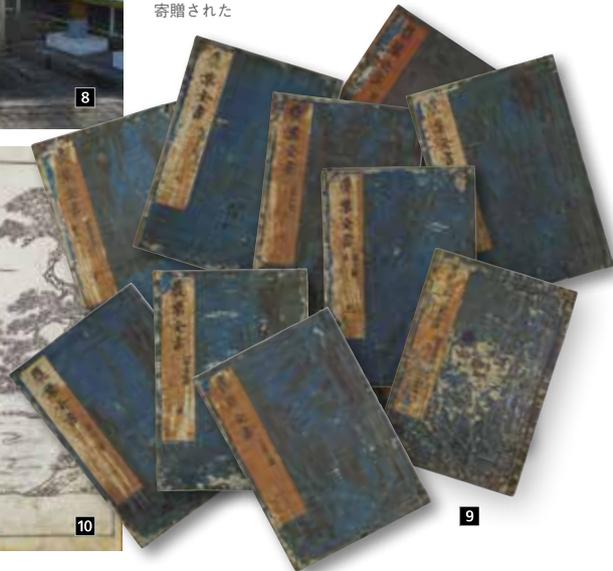
明治四十三年には、北筑軌道が加布里村―西新町間に開通しました（博多電気軌道株式会社を買収された後も、「北筑軌道」の名で親しまれた）。拡幅した県道（現 国道二〇二号）を、蒸気機関車が貨車や客車を牽引して走り、周船寺村にも停留所を置きました。さらに大正十四（一九二五）年になると、北九州鉄道（現 JR 筑肥線）がこの北筑軌道と平行して走り、周船寺村に駅を構えました。

停留所や駅ができたことで、周船寺は周辺地域から人びとを集め、賑わいを見せるようになりま（ただし、北筑軌道は昭和三年に廃止）。大正四年、商工会の有志によって劇場「朝日座」が村内に開業しました（七頁）。また同七年四月には、周船寺停留所前で大阪大相撲の興行をおこなっています。翌年冬には、大安売り市も開催しました。これは前年に前原の大安売り市に出店した周船寺の商店が、地元でも開いたものです。市を開くにあたっては景品を準備し、催し物もおこないました。おおむね夏と冬の年二回開催されていた大安売り市は、周船寺の名物となりました。

大正十年には福岡区裁判所周船寺出張所が開所し、周船寺・今宿・今津・元岡・北崎・怡土を管轄しました。さらに昭和八年頃になると、周船寺駅のそばに、周船寺・元岡・怡土村の共同農業倉庫（表紙の建物。現 JA 福岡市周船寺倉庫）をつくるなど、周船寺は糸島郡東部の拠点の村として位



5 大内教弘書状写（深川文書）。「怡土郡主船寺」の文字が見える。深川文書は所蔵者のご厚意により、平成28（2016）年に市史編さん室が調査し、所在が明らかとなった。内容は写本によってすでに知られていたが、それらのもととなった文書と思われる 6 伊親神社。江戸時代は「松ノ木天子社」「松木天神社」と呼ばれ、埴安命を祀っていたという（『筑前国続風土記附録』『筑前国続風土記拾遺』）。現在の祭神は伊親県主命・瓊瓊杵尊・木花開耶姫尊。昔も今も周船寺のランドマークとなっている 7 「主船司神社」と記された扁額。伊親神社にかかっていたものという。かつて庄屋を務めた個人宅に伝えられてきたが、近年、福岡市博物館に寄贈された



8 宮崎安貞の書斎（西区大字女原／福岡県指定史跡）。隣には安貞の顕彰碑も建つ。顕彰碑は明治21（1888）年のもの。碑文は福岡県知事安場保和の撰、建立発起人には怡土・志摩・早良郡長の樋口競らの地元名士が名を連ねる 9 10 『農業全書』とそこに描かれた「農事図」の一角（福岡市博物館蔵「元禄本」）。なお、さらに古い内容と形態をもつ宮崎家伝来本が、福岡市総合図書館に寄託されている（福岡県指定有形文化財） 11 宮崎安貞の記念碑。安貞の墓（元禄10（1697）年没／福岡県指定史跡）に隣接する。明治44年に明治天皇が九州での陸軍大演習を統監したのをきっかけに、安貞が追賞されたことを記念して、糸島郡農会が建立した



● 周船寺の選択―福岡市との合併―

置づけられていきました。

昭和に入り、戦争が終わると、国が市町村の合併を促進しました（昭和の大合併）。糸島郡でも、各町村が合併を模索していきます。昭和二十八年には糸島地方事務所（県知事の補助機関）が、糸島郡を東・西・北・中央の四ブロックに統合する試案を示し、周船寺村には、東ブロックとして元岡村・怡土村との合併を提案しました。

西・北・中央ブロックが合併を進めるなか、東ブロックでは、糸島郡全体を一つの村とすることを唱えていた怡土村が、中央ブロックの前原町と合併しました。一方の周船寺村には、これより先の昭和二十六年に村議会で福岡市との合併を決めたものの、市側の事情で実現しなかった経緯がありました。村はその後も福岡市との合併を模索し、陳情運動は同三十一年に一八回、翌年にはそれ以上に及んだといえます（『周船寺村誌』）。陳情では、周船寺村は郡の東部にあって、すでに福岡市と合併した今宿・今津（今宿は昭和十六年、今津はその翌年に合併）と政治・経済・交通を通じ、その中心的な存在であることを説いていきます。あわせて、あらかじめ簡易水道を整備するなど、合併に向けた環境も整えました。こうして、郡の東部にあって、福岡と糸島の交差点となっていた



16



14



12

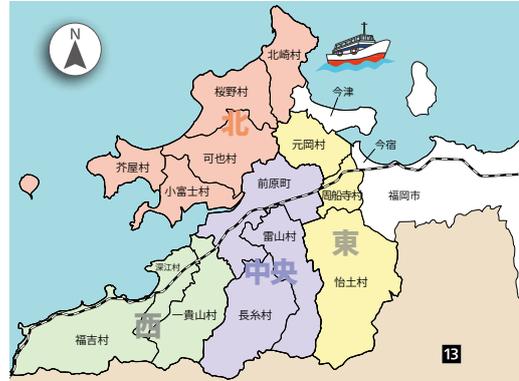


17

12 昭和2(1927)年の「北九州鉄道沿線名所遊覧図絵」 13 糸島地方事務所の合併試案(『糸島新聞』昭和29年2月6日掲載の図を参考に市史編さん室が作成) 14 合併記念パレード(昭和36年4月9日)。「福岡市・周船寺村合併祝賀会 記念アルバム」(昭和36年発行)からの1枚。「発刊のことば」によれば、「天もことほぐか、前日来降りしきった雨も早朝よりからりと晴れ渡り、村民の顔は明るかった」という 15 大安売り市で賑わった周船寺商店街(『すせんじ物語』より転載。時期不明) 16 現在の国道202号線(市境付近から福岡市側を望む)。写真の右手にはかつて工場が並んでいたが、現在は郊外型の大型店が営業している 17 西都北公園の「宮崎開ゆかりの碑」。宮崎安貞が開発したと伝えられる田地も、今ではマンション街に姿を変えた



15



13

● 「西の玄関」の新たな姿

近年、周船寺は福岡市の「西の玄関」として、さらに新しい姿を見せています。JR筑肥線を使って、市の中心部にも糸島市にも簡単に行くことができ、元岡に移転した九州大学の通学にも便利な、「住むためのまち」として人気を博すようになりました。それにとめない、商店街では店舗に代わって真新しい集合住宅が目立つようになり、田畑や工場だった場所の多くも大型店やマンションに形を変えました。今、周船寺では、交通の要衝という特性を変わず活かしながら、受け継いできた歴史と新しい姿が交差する、新たなまちづくりが進んでいます。

周船寺は、福岡市との合併を選択しました。運動が実り、昭和三十六年四月、元岡村・北崎村とともに福岡市との合併を果たしました。これを機に刊行した『周船寺村誌』のなかで、徳重兵三郎元村長は、市との合併をめざしたことで、「幾多の工場が立並び其様相も大分変ぼう」したので、合併が「又一層の繁栄を齎す」だろうと、周船寺のさらなる発展を期待しました(当時、周船寺には牛乳加工工場・菜種油製造工場・飲料工場などが立ち並んでいた)。こうした周船寺のまちを、『周船寺村誌』は福岡市の「西の玄関」と自負しています。

近年、周船寺は福岡市の「西の玄関」として、さらに新しい姿を見せています。JR筑肥線を使って、市の中心部にも糸島市にも簡単に行くことができ、元岡に移転した九州大学の通学にも便利な、「住むためのまち」として人気を博すようになりました。それにとめない、商店街では店舗に代わって真新しい集合住宅が目立つようになり、田畑や工場だった場所の多くも大型店やマンションに形を変えました。今、周船寺では、交通の要衝という特性を変わず活かしながら、受け継いできた歴史と新しい姿が交差する、新たなまちづくりが進んでいます。

参考文献・資料所蔵・協力

【参考文献】糸島郡教育会編『糸島郡誌』(臨川書店、初版1927年) ● 『糸島新聞』(糸島新聞社) ● 伊与田円止『日本農学者評伝』(日本図書センター、1991年) ● 『映画年鑑』各年(時事通信社) ● 古賀俊祐「資料紹介 深川文書」・田村杏士郎「中世近世移行期を生き抜いた一内内氏被官—深川氏の研究—」(『市史研究ふくおか』第12号、2017年) ● 財団法人西日本文化協会編『福岡県史 近代史料編 福岡県地理全誌(6)』(財団法人西日本文化協会、1995年) ● 周船寺公民館編『昭和58年度楽周院大学 かがり火—公民館落成記念号 周船寺の歴史—』(周船寺公民館、1984年) ● 周船寺村誌編纂委員会編『周船寺村誌』(周船寺村役場、1961年) ● 中村吉次郎『先覚 宮崎安貞』(多摩書房、1944年) ● 『日本農書全集 第12巻 農業全書 巻1~5』『日本農書全集 第13巻 農業全書 巻6~11』(社団法人農山漁村文化協会、1978年) ● 能間義弘著・今村書店サンクリエイト編集部編『福岡博多映画百年』(今村書店サンクリエイト、2003年) ● 福岡県糸島郡農会編『福岡県糸島郡事一斑』(福岡県糸島郡農会、1913年) ● 福岡市合併50周年記念事業委員会編さん委員会『福岡市合併50周年記念誌 すせんじ物語』(福岡市合併50周年記念事業委員会、2012年) ● 福岡市史編集委員会編『新修 福岡市史 資料編 近現代2 近代都市福岡の始動』(福岡市、2015年) ● 福岡市史編集委員会編『新修 福岡市史 資料編 考古1 遺跡からみた福岡の歴史—西部編—』(福岡市、2016年) ● 福岡市史編集委員会編『新修 福岡市史 資料編 中世2 市外所在文書』(福岡市、2014年) ● 『福岡市・周船寺村合併祝賀会 記念アルバム』(1961年) ● 福岡市立周船寺小学校百周年記念会編『教育百年史』(福岡市立周船寺小学校百周年記念会、1977年)

【資料所蔵】個人蔵 ▶ P.5 5 / P.10 『日米日常会話』 ● 福岡市博物館 ▶ P.5 7 / P.6 12

【転載】糸島郡教育会編『糸島郡誌』(臨川書店、初版1927年) ▶ P7 『朝日産』 ● 周船寺公民館編『昭和58年度楽周院大学 かがり火—公民館落成記念号 周船寺の歴史—』(周船寺公民館、1984年) ▶ P7 『雷永祝五郎氏の思い出地図』 ● 『福岡市・周船寺村合併祝賀会 記念アルバム』(1961年) ▶ P6 14 ● 福岡市合併50周年記念事業委員会編さん委員会『福岡市合併50周年記念誌 すせんじ物語』(福岡市合併50周年記念事業委員会、2012年) ▶ P6 15

【図版作成】P.3 1 ▶ 下図：地理院地図(国土基本情報) 地図情報(福岡) 2015年発行(国土地理院)を基に作成(作成：馬場昭夫) ● P6 13 ▶ 下図：昭和11年測量5万分の1地形図「前原」「福岡」「浜崎」「背振山」(国土地理院)を基に作成/合併案：『糸島新聞』昭和29年2月6日を参考に作成(いづれも市史編さん室作成)

【写真所蔵】福岡市埋蔵文化財センター ▶ P.3 2・9

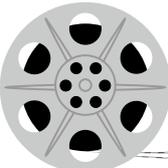
【写真撮影】市史編さん室 ▶ 表紙 / P.2 4 / P.5 5・6・8・9・10・11 / P.6 12・16・17 / P.8

【協力】内川義則氏 ● 川島貞雄氏 ● 西都公民館 ● 周船寺公民館 ● 周船寺商店街のみなさん ● 徳永哲也氏 ● 雷永英秋氏 ● 福岡市西部地域交流センターさいとびあ ● 福岡市農業協同組合 ● 松尾善和氏



富永祝五郎氏の 思い出し地図

この地図は、『昭和58年度楽周院大学 かがり火一公民館落成記念号 周船寺の歴史』(周船寺公民館、1984年)に掲載された「富永祝五郎氏の思い出し地図」(手書き)を書き起こして転載するものです(デザインは市史編さん室にて改めました。読み取れなかった文字は、推定の文字や「?」を入れ、赤色で表記しています)。富永祝五郎氏は、福岡市との合併時に周船寺村の収入役を務めた人物です。この地図は、晩年に記憶をたどって記録されたものですが、今では住宅街となった周船寺の東地区が、かつて商店街として賑わった様子をよく伝えており、貴重です。まちの賑わいは当初ここが中心でしたが、鉄道の開通によって、駅のある西側に広がっていきました。



周船寺の映画館「旭座」

大正4(1915)年、周船寺村の商工会「連商会」の有志が、劇場「朝日座」を建設しました(『周船寺村誌』)。場所は伊観神社にほど近い、北筑軌道の停留所そばでした。まちの賑わいが、東側から西側へと広がっていたことがうかがわれます。今は集合住宅となっており、面影はありませんが、写真で見ると朝日座の姿は堂々としたものです。

この朝日座は地元で長く愛され、さまざまなおもてなしを上演しました。たとえば歌舞伎。昭和25(1950)年9月29・30日には、関西から市川右団次・尾上喜久太郎ら80名以上を招いています。このときの演目は「忠臣蔵」などでした。料金は大人が100円、子供はその半額です。昼3時に開幕し、終演は夜8時50分でしたが、『糸島新聞』に載せた広告には、わざわざ「九時十分の下り列車に必ず間に合います」と書いており、村内だけではなく、周船寺駅を有する鉄道(元の北九州鉄道、現在のJR筑肥線)を利用し、前原方面からの集客も期待していたことがわかります。この年の12月には、映画『影法師』(松竹)を上映しています。阪東妻三郎が一人二役を巧みに演じ分け、山田五十鈴・入江たか子らと共演した人気作です。そのほかに、新派劇や剣劇などの公演もおこなっており、朝日座が多彩な内容で人びとを楽しませていた様子が目に浮かびます。

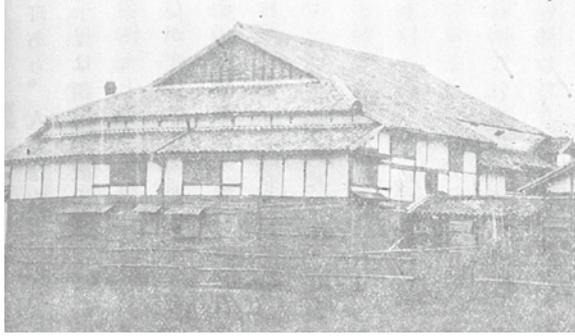
昭和28年になると、朝日座は新しい経営者のもとで装いを新たに、常設の映画館「旭座」となりました。福岡県は全国のなかでも映画人気が高い地域でした。県下の映画館は、旭座が開館する前年には全部で187館ありましたが、開館の年には220館にまで増え、その後もますます数を増していきました。この頃、平均すると県民1人あたり年7~9回は映画館を訪れており、この数字は東京・大阪・京都について全国第4位の頻度を誇っています。演劇場から映画館への転換は、ちょうど映画が飛躍の人気を得て、娯楽の主役となっていた頃のことでした。

『映画年鑑』掲載「全国映画館総覧」によれば、映画館として改築された旭座は、木造2階建ての240席、国産のローラー社の映写機を使って邦画を上映していました。改装によって映画館らしく土間にイスを導入した一方で、歌舞伎なども上演できるように花道や棧敷はそのまま残してありました(『糸島新聞』昭和28年5月16日)。地元の方に話を聞くと、イスは長イスで、座布団を有料で貸し出していたそうです。開館直後は、『アジャパー天国』(新東宝、古川ロッパ・清川虹子出演)、『母波』(大映、三益愛子出演)など、この年の人気作を連日上映しました。糸島郡では前原に大きな映画館がありましたが、郡の東部にはなく、旭座の開館は映画ファンにとってうれしい出来事だったことでしょう。

そして開館当時の新聞によれば、旭座によって周船寺の商店街が「見違えるように活気を帯びてくるだろう」という期待も寄せられていました。もともと商工会の有志によって設立された劇場は、映画館の時代になっても、単に村内に娯楽を提供するだけでなく、糸島郡の各地から人びとを集め、周船寺の商圈を拡大する役割も担っていました。

ところが、映画館の乱立による競争に加えて、人びとの関心がテレビにも向けられるようになると、しだいに全国の映画館の経営に陰りが見え始めます。福岡県においても、昭和35年前後には400館を超えていた映画館の数は、同38年に300館を下回り、その2年後になると221館にまで減りました(福岡県の場合は炭鉱の減少の影響も大きい)。姿を消した映画館の一つに旭座の名もありました。劇場の時代から数えると約50年経った、昭和39年のことでした。こうして周船寺から映画館はなくなりましたが、旭座の姿は、映画最盛期の人気作品やそれを観たときの一人一人の思い出とともに、今も周船寺の人びとの記憶に残っています。

※福岡県の映画館数・入場者数・入場回数は『映画年鑑』による。



▲『糸島郡誌』に掲載された、映画館に改修される前の「朝日座」

レポート

第12回・第13回福岡市史講演会を開催しました

平成28年11月26日、第12回福岡市史講演会「空の福岡、海の福岡—近代都市福岡の来歴を語り直す—」を開催しました。講師の柴多一雄先生（長崎大学名誉教授）には、現在の福岡市域には大正の終わりから昭和の初めにかけて、いち早く水上や陸上の飛行場が置かれ、数少ない海外への空の窓口として、企業や国の機関が集まってきたことを教えて頂きました。交通や行政といった拠点機能を高めることで発展していく福岡市の方向性は、このときすでに決定づけられていたとのご指摘は、注目を集めるものとなりました。石橋知也先生（福岡大学助教〈講演時〉。現長崎大学准教授）には、福岡市が自身の目指す姿を、工業都市から第3次産業がさかんな管理中枢都市へと転換した時期やきっかけについて、お話し頂きました。今の福岡市の姿を生んだこの大転換の背景には、政令市への指定をめぐる、工業のさかんな北九州市とどのように差別化をはかるかという模索があったそうです。最後のトークセッションでも指摘された通り、古来、人・物・情報の流通の結節点となってきた福岡市の姿が、近代以降においても浮かび上がってきた講演会となりました。

また、平成29年10月7日には、第13回福岡市史講演会「遺跡からみた福岡の対外交流—西部の遺跡を中心として—」を開催しました。『新修福岡市史 資料編 考古1 遺跡からみた福岡の歴史—西部編—』で対象とした福岡市西部の遺跡について、特に対外交流の面から講師の方々にお話し頂きました。第1部では、下條信行先生（愛媛大学名誉教授）に弥生時代に西区今山で製作された石斧について、柳沢一男先生（宮崎大学名誉教授）に西区今宿に多数分布する古墳について、それぞれ講演頂きました。第2部では、埋蔵文化財を専門とする市の職員に、歴史書の一節とそれに関わる遺跡について、報告してもらいました。最後に小畑弘己先生（熊本大学教授）の司会のもと、登壇者全員でおこなったディスカッションでは、これらの遺跡を通して、福岡市の西部が、長い間、国内外の交流の核となる地域であったことが確認されています。

第12回・第13回の講演会では、違う時代を、異なる研究方法で扱いながら、はからずも“福岡は人々の交流拠点”という同じ特徴が指摘されました。福岡市の未来を展望するうえでも参考となる講演会になったと感じています。両講演会の詳しい内容は、『市史研究ふくおか』第12号・第13号にそれぞれ掲載していますので、ぜひご覧ください。



レポート

南当仁公民館で講座を開催しました

平成28年7月14日および同29年7月13日の2回にわたって、中央区の南当仁公民館にて歴史講座を開催しました。これは南当仁公民館によって、高齢者地域参画事業「こうじゅ大学」の一つとして企画され、依頼により市史編さん室から講師を派遣したものです。

平成28年には「南当仁校区の江戸時代」をテーマに、南当仁校区（中央区地行浜・地行・今川と、鳥飼・大濠の一部）が、江戸時代にはどのような景色だったのか、人々はどうかしていたのかについて、古地図や古文書を見ながら振り返りました。西新に住んでいた足軽の日記に記された、鳥飼八幡宮の神楽や能を楽しみにしたり、地行や唐人町の菩提寺に墓掃除に出かけ

たりするくらしぶりは、参加者にも身近に感じられたようです。

翌年には「皆さんの記憶の中にある南当仁の歴史」と題して、同校区の明治から昭和にかけての様子や、そうした昔のことを調べてまとめる方法について、講座を開きました。校区内にかつてあった福岡県女子師範学校を例に、断片的な記憶やまちに残っている痕跡を、地図や写真でつなぎながら、まちの移り変わりを考えていきました。この講座をきっかけに、福岡市の「地域の担い手パワーアップ事業」の一つとして、校区の有志による歴史散策と、それに基づいた歴史マップづくりが始まり、すでに成果が公表されています。



◎ 考古

『資料編 考古2』の本格的な編集作業に入りました。本誌第二号で紹介した中央区警固にある古墳を覚えていますか。国道道路南側の丘陵上に分布する、警固丸山古墳・警固茶臼山古墳・警固茶臼塚古墳の三つで、これらはまとめて警固古墳群と呼ばれています。付近では、福岡城内の天守台にあたる場所や鴻臚館跡からも、古墳の石室や副葬品等が見つっています。

市内東部（東・博多・中央・南区）の遺跡を扱うこの巻では、博多や赤坂・警固といった都心部で見つかった遺跡についても、第IV部「主要遺跡解説」で紹介する予定です。

◎ 近世

昨年、九州大学では伊都キャンパスへの統合・移転が完了しました。旧箱崎キャンパスにあった附属図書館や付設の九州文化史資料部門には、福岡藩筆頭家老の三奈木黒田家や家老吉田家の文書、九州大学名誉教授檜垣元吉氏が収集した檜垣文庫史料など、福岡藩に関する多くの史料が収められています。

近世専門部会では、移転にともない閲覧業務が一定期間停止となるのに備えて、あらかじめ計画的に作業を進め、福岡藩政全体をうかがえる日記や記録類を中心に、調査・撮影を済ませています。今後は、そこで得られる新しい知見を『新修福岡市史』へ反映できるように、作業を進めていきたいと思えます。

◎ 古代

文献資料の収集が続いています。そのなかには、史実の行間を埋める、説話なども含まれています。例えば、博多の大夫貞重（秦定重）の話。ある

時、彼は唐人から借金をして有力者や知人への贈り物を準備し、上京しました。事がうまく運び博多に戻ると、部下が都の近くで安く手に入れた真珠一玉が、この唐人に高く売れ、それだけで借金を完済したとのことです（『今昔物語集』巻二六・『宇治拾遺物語』巻一四）。唐物（輸入品）だけではなく、日本の品も大陸に渡ることで大きな利益を生むことや、仲介した博多の人びとに富をもたらしたことをよく伝えている物語です。

◎ 近現代

福岡県立図書館所蔵の河内資料をご存知でしょうか。昭和初期に福岡市長に選ばれた、博多の実業家である河内卯兵衛の旧蔵資料です。内容は書簡をはじめ多岐にわたっていますが、地元企業の設立趣意書や営業報告書が多く残されていることが特徴です。

例えば、大正年間には博多国技館の建設が計画されていましたが、資金の調達が進まず頓挫したことが、関係する経営資料からうかがえます。福岡が近代都市として発展を見せるなかで、モダンな娯楽、文化施設のニーズが高まっていたのでしよう。

『資料編 近現代3』の刊行に向けて、モダン都市福岡の発展をテーマに資料の調査と編集が続いています。

◎ 中世

『資料編 中世3』には、多数の古記録や文学作品を収録する予定です。しかし、それぞれがかなりの分量を持つ資料ですので、『中世1』『中世2』に収録した古文書のように、全文を掲載することは困難です。そのため、福岡市域について記述されている部分を抜粋して収録することになりますが、該当する箇所だけではなく、前後の文脈まで読まなければ正しく意味を理解できないという場合も少なくありません。

限られたページのなかで、どのように収録すれば、資料の内容やおもしろさを伝えられるか、現在検討しているところです。

◎ 民俗

明治・大正の新聞には、夜間に橋から転落する事故や、橋上で暴漢に遭う事件の記事が見え、当時、夜の橋は暗く危険な場所だったことがうかがえます。明治後半から市街地で街灯の普及が始まると、新聞投稿欄には「石堂橋に電灯の設置を望む暗夜の通行大に困しむ」「中洲橋春吉橋にも電灯を点けて下さい」といった声が増えてきます（『福岡日日新聞』明治三十一年十一月十五日、同三十二年三月十一日）。町なかの暗所も街灯設置の要望が多く、夜の防犯防災のために街灯が不可欠なものとして認識されていく過程が見えてきます。

『民俗編3』ではこうした資料や聞き書きを基に、明治から現代までの福岡の夜の諸相を描きます。

新修 福岡市史 ナナメ読み

その4 特別編 活字メディアの時代—近代福岡の印刷と出版—

今回のナナメ読みは



A4判 上製本（クリアケース入り）
384頁／オールカラー
頒価 3,600円（税込）

紙飢饉に訪れた印刷黄金時代—戦後福岡の印刷事情—

海外旅行に行くとき、または海外からのお客様をお迎えするとき、まず頭に浮かぶのは言葉の問題ではないでしょうか。二〇二〇年の東京オリンピックに向けて外国語教室に通っている、という人も多いでしょう。書店に行けば、英語に限らずあらゆる言語の教材が数多く並んでいます。

太平洋戦争末期、英語は「敵国語」として排除されました。しかし敗戦後には一転、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の占領政策により多くの外国人が駐留し、英語が必要とされるようになります。

そうしたなか、敗戦からわずか一カ月後に企画され、発売から三カ月ほどの間に三六〇万部という驚異の売り上げを記録した本があります。『日米会話手帖』（誠文堂新光社、昭和二十年十月、全三三頁）という、英会話のハウツー本です。そしてこの本のヒットに便乗し、すぐに多くの類似本が出されましたが、そのうちの一つは福岡でつくられました。

『日米日常会話』（西日本新聞社、昭和二十年十一月一日、全六二頁）。ポケットサイズ（B七

判／九一×二二八mm）で、内容も本家と同じくすぐに使える英会話の例文が対訳形式で並びます。冒頭の「日米会話のコツ」と題されたページには、「日本人の間には外人との会話を難しいものときめてかゝつてゐる人が多いが、決してそんなに困難なものではない」のだから「要は恥しがらずに大胆に、正確、敏速に話すこと」が大事とあります。また、「日本人は会話の場合、兎角お上品に口を開くのでハッキリ発音が出来ない」から「会話に際してゼスチュアを添へると更に判り易い」、だとか、映画を観る時には日本語字幕に頼らず音声聞くようにすれば、英語の発音が耳に慣れて良い、など、現代でも通じるような英語上達のアドバイスが書かれています。こちらも約五〇万部の売り上げを記録しました。

また、奥付にある「配給元 日本出版配給統制株式会社」という表記からは、この本の印刷用紙が正規の配給で賄われたことが分かります。「紙飢饉」といわれ、印刷用紙が相当制限されていた時代です。政府がこのような破格の割り当てをした背景はさまざま考え

られますが、それにしてもこれだけの部数の本が福岡でつくられたということは注目すべき点です。それは、東京・大阪の印刷会社が空襲で壊滅的な被害を受けたあと、それらに代わる印刷所がいち早く復興できた地方都市の一つが福岡だった、ということなのです。

このように『日米日常会話』の出版経緯は敗戦直後の福岡がまさに印刷業にとっての黄金時代だったことを物語っています。ではなぜ福岡が？ という疑問が浮かんできます。そこにはこの時代ならではの事情と、いくつかの条件が重なったことに理由があるのです。……その謎は、『特別編 活字メディアの時代』のなかに解き明かされています。



▲『日米日常会話』（個人蔵）はスマートフォンほどの手のひらサイズ。中央1ヶ所を針金で留めただけの簡易平綴じ製本で、本家が1冊80銭だったのに対し、50銭で売られていた

電話申込み・店頭販売

福岡市博物館 ミュージアムショップ（福岡市早良区百道浜3丁目1-1）
☎ 092-823-2800

店頭販売

ジュンク堂書店 福岡店（福岡市中央区天神1-10-13）
☎ 092-738-3322
丸善 博多店（福岡市博多区博多駅中央街1-1 JR博多シティ8F）
☎ 092-413-5401

お問い合わせ先

福岡市博物館 市史編さん室（福岡市早良区百道浜3丁目1-1）
☎ 092-845-5245



タイムマシンで となりの駅へ

— 近過去への旅 —

第4回

平成の終わりに

文=有馬 学 (福岡市史編集委員会委員長/福岡市博物館長)

絵=新田 岳 (cubicface)

text_Manabu ARIMA, illustration_Takeshi NITTA

福岡市博物館のこれまでの歴史は、ほぼ丸ごと平成という時間と重なっている。博物館の開館は平成2(1990)年である。その前年である平成改元の年には、ここ百道浜^{ももち はま}の埋立地でアジア太平洋博覧会が開催された。平成の初めに降り立って見るには、何もわざわざタイムマシンに乗る必要はない。私たちの多くにとって記憶のなかにある世界だろう。目をつぶっても歩ける(はずだよ?)。でも念のために確かめてみよう。平成がはじまった頃の私たちの前にあるのはどんな世界か。

平成元年は天神地区に次々と新しい商業施設がオープンした年だ。ユーテックプラザ(なつかしい! なんて言ってるのは私のようなじいだけ? 現天神ロフトビルのこと)、ソラリアプラザ、イムズビル。そのイムズビルがもう建て替えの時期だそうだ。福岡という都市の開発(現代化)の次のステージがどのようなものになるのか、まだ誰にも見えていない。でも30年前の市民にとっては、都市の新しい表情を見るだけで十分だったかもしれない。

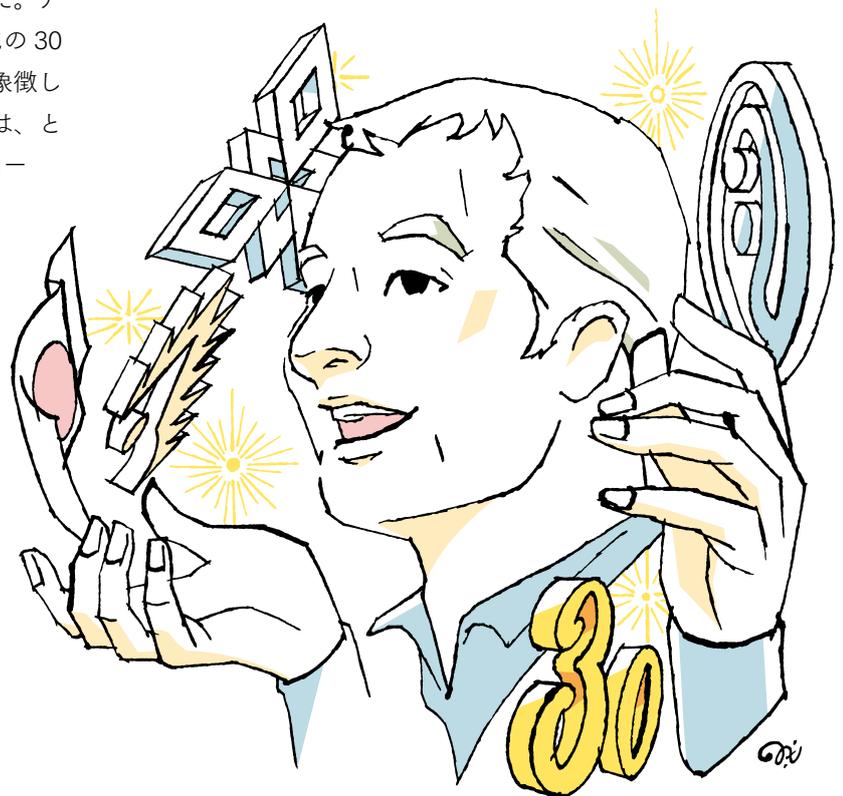
平成2年には第1回アジアマンスが開催された。アジア太平洋博覧会と同様に、今から見ると平成の30年が福岡にとってアジアの時代であったことを象徴しているかのようだ。しかしそのアジアの時代には、とても大きな幅がある。張芸謀^{チャンイーモウ}監督の出世作「紅いコリヤン」の日本公開はまさに平成元年だが、山口百恵^{コンリー}というのが最大の話題! だった主演女優の輩^{モイエン}は、今や世界女優史を彩るレジェンドだ。張芸謀がやがて北京オリンピックの開会式を演出し、原作者の莫言^{モイエン}がノーベル文学賞を受賞するなど、もちろん予測したものは皆無だろう。

私たちの隣国は世界を動かす超大国となり、大型クルーズ船の襲来に驚いたのもつかの間、家族や友人同士で落ち着いて日本旅行を楽しむ春節の観光客の姿に、「爆買い」なんて言葉は早くも死語だ。

逆から見ても事態は同じだ。2006年アメリカのNewsweek誌が「世界で最もホットな10都市」を特集し、アジアへの出入り口として福岡市を選んでいる。私たちの多くは、「なるほど」としか思わないだろう。だがこれだって、平成の初めに立ってみると、驚くべきことなのだ。

アジアそれ自身も、福岡にとってのアジアの時代も、そして何よりも福岡という都市自体が、この30年の初めと終わりではかなり異なる姿やふるまいを見せるようになった。アジアの経済発展、中国の大国化、それらがもたらす国際関係の変化、グローバル化と人々の移動、異次元とも思える情報化の進展、これらのすべてが平成の30年に生じた変化である。この30年の変化こそは、「過去は外国である」ということを証明してあまりあるだろう。

博物館や市史編さん事業をとりまく環境は激変している。私たちは改めてそのことを自覚すべきなのだ。せめて時代の目撃者としてどう振る舞うかくらいは考えておきたいものだ。



早いもので、川添昭二先生(九州大学名誉教授)の一周忌を迎えました。ながく福岡市史編さん委員会の相談役をお務め頂いていた先生の突然の訃報に接したのは、平成30(2018)年3月22日のことでした。先生には編さん事業が軌道に乗るまで、数多のご指導をいただきました。この事業は、正史的には田鍋隆男『「新修 福岡市史」が刊行されるまで』(『市史研究ふくおか』第6号、2011年)に記されているような過程を経て今日に至っていますが、今回は先生が福岡市史編さんに対し示された数々のご支援の一端を紹介し、改めて感謝の意を捧げたいと思います。

先生がご自分の研究分野で福岡市と本格的に関わられたのは、昭和46(1971)年に、福岡市教育委員会から『注解 元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—』を刊行されたことにあります。これは文化財保護意識が高まっていくなか、国指定史跡元寇防塁を、建築学・考古学・土木工学に文献史学も加わって総合的に調査研究した際に、文献調査の成果の一端を刊行したものでした。その後の蒙古襲来の研究に資するところ、多大なものがあったと聞いています。時あたかも昭和49年は元寇(文永の役)から700年にあたり、記念事業としても意義のあるものでした。

先生の助言によって、福岡市はさらに元寇防塁を広く周知させるため、『蒙古襲来絵詞』(肥後の竹崎季長が、文永・弘安の2度にわたる蒙古合戦時における、自らの武功を描かせた絵巻)を複製して出版することを計画しました。これは中世武士の思想・武器武具・防塁などを知れる第一級の元寇資料です。複製にあたっては、所蔵する宮内庁の格別のご厚意で、御本のカラーフィルムが貸与され、未撮影部分を新たに撮影することや、現物と照合しての色校正・文字解読も許可されました。これまで現物に接する機会がなかった先生は、閲覧をことのほか喜ばれ、京都御所での作業に同行されました。当時、「詞書」(絵巻の内容を説明する文章)部分のカラー写真はなく、研究者はモノクロ写真で研究するしかありませ

んでした。先生が閲覧の際に、これまで墨書と思っていた箇所が実は「朱書き」だったことを発見して、声を上げて喜ばれたことを今でもよく覚えています。

この一連の刊行を通じて先生は、行政に文献資料の収集と公開の重要性を説かれていました。また、福岡市博物館の常設展示を計画するにあたっては、依拠すべき自前の自治体史がないことを指摘され、その編さんの意義を市役所の上層部に強く訴えて、現在の市史編さん事業の契機をつくられました。

市史編さんの再出発が見え隠れしてきた頃(本誌第21~23号の本コラム)からは、先生は自らの自治体史編さんの体験をふまえて、編さん体制、とりわけ専従の行政職員を配置することを強く主張されました。これは調査・執筆に携わる研究者に事務作業を望むなというところで、ややもすると従来の自治体史編さんが、研究者に丸投げに近い形で行われていたことに強く危機感を持たれていたためです。その際、刊行時期の遅れを自ら議会に出向き陳謝したこと、馴れない予算書作りを手伝わされたことなどを、例にあげられていました。筆者も、わずかながら自治体史編さんのお手伝いをした経験から理解できるところがあり、編さん体制づくりの重要性を考えさせられました。万全な体制をつくることはとても難題に思われました。それでも編さん室が再スタートするときには、行政事務の室長(課長職)と主査(係長職)、さらに専門職の主査も確保でき、先生に大層評価していただきました。

平成12年に編さん準備予算が付き、本格予算が確保できたのは平成16年度からでしたので、その間、丸4年かかった事になります。それから15年が経ち、多くの資料編・民俗編・特別編の刊行を続けています。刊行するたびに、先生のお手元に本をお届けしていましたが、さっそく丹念にページをめくられ、関係者への賛辞を口にされるのが常でした。これからも、先生に順調に刊行のご報告ができることを切に希望しています。

表紙の写真 まちの変化を見つめる [西区周船寺]

特集は前号の地域に隣接する周船寺、特に商店街付近の移り変わりを取り上げました。前号の飯氏をはじめとする山側の地域が北に長く延びた峰によって東西を隔ててきたのとは対照的に、この場所はその峰の北側にあつて、福岡と糸島を結んでいました。表紙の写真は周船寺駅そばの「JA福岡市周船寺倉庫」です。もとは周船寺・元岡・怡土村の共同農業倉庫でした(昭和8年頃の建設という)。近年、人気の住宅地として姿を変えつつある周船寺を、静かに見つめるまちの先輩です。

お詫び

既刊の「市史だより Fukuoka」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

20号 P5 「日佐こらむ お伊勢まはりは大飛躍」【誤】「日露戦争戦役軍人」(明治29年)→【正】「日露戦役出征軍人」(明治40年建立)
22号 P6 「シーサイドももち建物図鑑」【誤】「福銀シーサイドセンター」NBCシーサイドビル→【正】「福銀シーサイドセンター」NCBシーサイドビル 23号 P7 「路傍の祠堂・神仏MAP」【誤】「山ノ鼻公園」→【正】「山ノ鼻古墳公園」、P12「表紙の写真 お堂と石碑に出会う」【誤】「飯石(いいいし)神社」→【正】「飯石(いいせき)神社」

福岡市史についての最新情報はこちらから。「市史だより Fukuoka」のバックナンバーも見られます!

福岡市史ホームページ ▶ <http://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/>

福岡市博物館の情報はこちらから。

福岡市博物館ホームページ ▶ <http://museum.city.fukuoka.jp/>

Printed in Japan.

Copyright by Fukuoka City Museum

本誌掲載の写真・図版・記事などの無断複写・転載を禁じます。